

埼玉県における産業動向と見通し

産業天気図は、業種によりバラツキがみられるものの、3業種で改善の見通し

概況

わが国の景気は、一部に足踏みが残るもの、緩やかに回復している。埼玉県の景気も緩やかに持ち直している。

全国では実質賃金がようやく本年6月にプラスに転じるなか、南海トラフ地震臨時情報や台風による集中豪雨などにより個人消費の腰折れが懸念されたが、防災関連商品や猛暑対策商品の販売などが下支えし、個人消費は一部に足踏みが残るもの、このところ持ち直しの動きがみられる。

先行きについては、輸入物価の上昇ペース鈍化が予想されるもと、今年度の強い賃上げ効果で個人消費は持ち直しの動きが続くことが期待される。

一方、10月に公表された日銀短観においては、企業の業況判断DI（「良い」-「悪い」の回答割合）が+14（全規模・全産業）と、業況が「良い」とするところの方が多いになっている。企業の業況が良いことや、人手不足感も強いことから、合理化投資など設備投資は底堅く推移することが見込まれる。

個人消費や設備投資に支えられ、埼玉県の景気は持ち直しの動きが続くことが予想されるが、海外景気の動向や国際情勢および政治情勢については不透明感が強く、状況の推移には留意が必要である。

聞き取り調査の結果、埼玉県の7~9月期の産業天気図は、輸送機械、建設、小売が「薄日」となる一方、化学が「曇り」、食料品、一般機械、電気機械、鉄

鋼が「小雨」となり、業種によるバラツキがみられた。

10~12月期も、7~9月期と同様、業種によりバラツキがみられるものの、3業種で改善する見通しとなった。

主要産業の動向は、以下の通り。

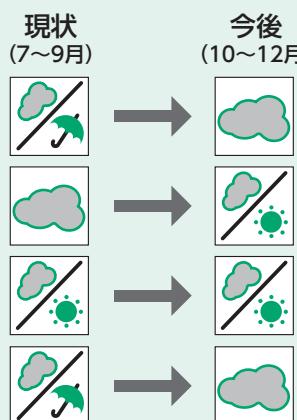
- 食料品**の生産は、前年を下回ったとみられる。先行きは一部に弱さがみられるものの、徐々に持ち直すとみられる。
- 化学**の生産は、前年並みの水準で推移したとみられる。先行きは堅調に推移することが見込まれる。
- 輸送機械**の乗用車生産は、前年を上回ったとみられる。先行きの生産は、新型車効果が一巡に向かうため、前年並みからやや減少すると予想される。
- 一般機械**の生産は、前年をわずかに上回ったとみられる。先行きは前年並み程度の水準で推移すると見込まれる。
- 電気機械**の生産は、大幅な減少が続いている。先行きも弱い動きが続くものの、徐々に持ち直すことが期待される。
- 鉄鋼**の生産は、前年を下回ったとみられる。先行きも前年を下回るとみられる。
- 建設**は、公共・民間ともに手持ちの工事量は多く、堅調な推移が続いている。先行きも堅調な動きが見込まれる。
- 小売**の売上は、猛暑の影響で総じて前年を上回ったとみられる。先行きも増加が続くと予想される。

産業天気図

現状
(7~9月)

食料品

今後
(10~12月)



化 学

現状
(7~9月)

今後
(10~12月)

輸送機械

一般機械

天気図の見方



現状
(7~9月)

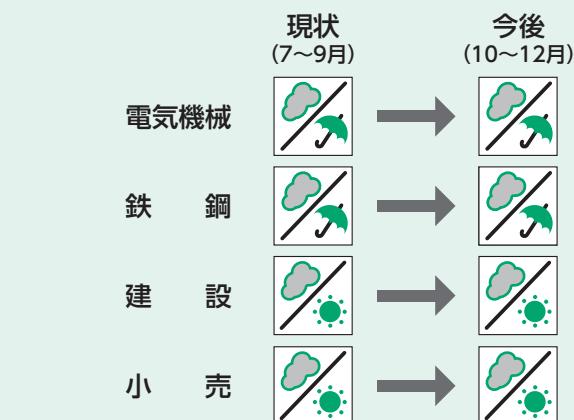
電気機械

今後
(10~12月)

鉄 鋼

建 設

小 売



食料品

生産に持ち直しの動きがみられる



食料品の生産動向の現状は持ち直しの動きがみられる。生産指数は昨年まではほぼ横ばいで推移してきたが、本年に入り前年同期比で大きくマイナスに転じ、県内の食料品生産は、コロナ禍の2020年より低い水準となっていた。2024年4~6月期には前年同期比▲10.0%と2期連続で大きくマイナスとなったものの、直近ではマイナス幅の縮小がみられ、昨年の水準に持ち直す動きがみられる。

2022年より生じた物価の高騰により、製品を値上げする動きが相次いでいる。家計は生活防衛色を強めており、購入頻度を抑えたり、より安価な製品に購入をシフトするなど、消費行動を変えている。

今夏は昨年以上に猛暑日が続き、アイスクリーム・冷たい麺類・飲料等の夏物商材の消費が増加した。埼玉県はアイスクリームと麺類が食料品生産の約3割を占めており、食料品生産全体の引き上げに一定寄与したとみられるが、その他の製品は前述の消費行動の変化もあり、伸び悩んだようだ。

先行きは、実質賃金の上昇率が高まっていることが食料品の消費を押し上げ、生産の増加に寄与していくとみられる。一方で食料品は今後も値上げの動きを続ける見通しであり、一度生活防衛色を強めた家計の消費が持ち直すまで時間を要するとみられる。また原材料となる一部の農産物の品薄が、今後の生産を下押しさせる懸念もあるようだ。

●食料品の生産指数(前年比)の推移(埼玉県)



化 学

堅調に推移する

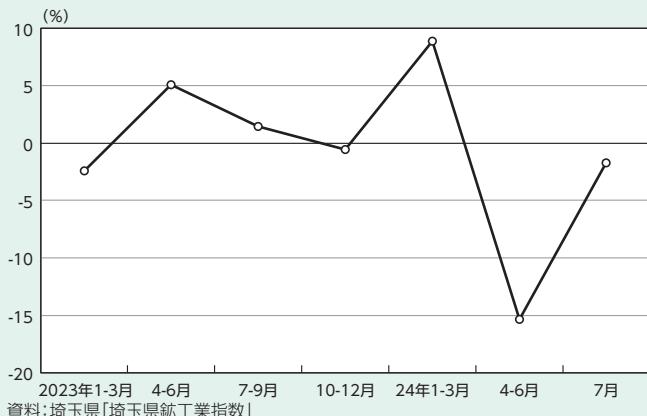


県内の化学の生産動向はこのところ浮き沈みを繰り返しているものの、概ね堅調に推移している。生産の約6割を占める医薬品は、昨年後半に複数の感染症流行が重なったことで、医療用医薬品に需要が集中し、出荷の増加に繋がった。生産も同様に水準を高めている。本年に入り感染状況はやや落ち着いてきており、化学の生産指数の2024年4~6月期は前年同期比▲15.4%とマイナスに転じている。

今夏は前年以上に猛暑日が続き、UVケア関連などの医薬部外品・化粧品の出荷が伸び、生産を下支えしたため、足元では前年同期の水準に持ち直す動きがみられる。但し原材料費の高騰により、製品の値上げが相次いだことから、消費者向けの一部の製品に買い控えが生じ、生産を下押しさせている。また塗料、ウレタンフォームなどの建築資材に供される化学製品は、建築工事の進捗が低調なことから水準を低下させた。化学の生産は品目別で強弱が入り混じる状況だが、概ね医薬品の生産の増加が全体をけん引した。

先行きは、今夏に日照時間が長かったことから、来年春先の花粉飛散量が例年よりも多くなる見通しであり、抗アレルギー薬などの医薬品需要が高まる見通しで生産を押し上げるとみられる。また実質賃金の上昇率が高まっていることにより、買い控えた消費者向けの一部製品で消費の持ち直しが期待され、化学の生産は引き続き堅調に推移する見通しである。

●化学の生産指数(前年比)の推移(埼玉県)



輸送機械

乗用車生産は前年を上回る

県内の乗用車販売台数（軽を含む）は、一部メーカーの認証不正による生産・出荷停止の影響で、1～3ヶ月期以降2四半期連続で減少したが、その後順次生産が再開されたため、7～9月期は前年を上回った。

生産動向をみると、県内の輸送機械（乗用車・トラック・自動車部品等を含む）の生産指数は、昨年1～3ヶ月期以降増加が続いている。とくに昨年10～12月期は前年比63.2%増と大幅な増加となった。半導体不足が解消し受注残分の生産が進んだことと、完成車メーカーの新型車の販売が好調だったことなどを反映している。新型車の好調は続いており、伸びは鈍化するものの7～9月期の県内生産も前年を上回ったとみられる。先行きの生産は、新型車効果が一巡に向かうため、前年並みからやや減少すると予想される。

7～9月期のトラックの生産は前年並みにとどまった模様である。トラックの需要は、都心で再開発が続き、物流施設の建設も行われているが、残業規制が厳しくなる「2024年問題」で建設工事が停滞したり、宅配便



は持ち直しているもののやや伸び悩むなど強弱入り混じった状況にある。先行きも、こうした傾向が続くとみられ生産は横ばいで推移すると予想される。

部品メーカーの生産は完成車メーカーと同様に推移したとみられる。先行きは、乗用車部品の生産は前年並みからやや減少するとみられ、トラック部品の生産は横ばいで推移すると予想される。

●輸送機械の生産指数（前年比）の推移（埼玉県）



一般機械

前年をわずかに上回る

県内的一般機械（汎用機械+生産用機械+業務用機械）の生産指数は、本年4～6月期の前年比▲7.9%まで5四半期連続して前年割れとなった。生産用機械が4四半期連続で前年を上回る一方、汎用機械は5四半期連続で前年を下回っている。業務用機械は3四半期ぶりに前年を上回った。

7月の生産指数は、生産用機械が高い伸びとなったことで、同+8.5%と前年を上回っており、7～9月期を通して、一般機械の生産は前年をわずかに上回ったとみられる。

内訳をみると、汎用機械では、機械受注の減速を受けて、好調だった空気圧機器が昨年の春頃から減少に転じた。生産の水準は引き続き高いものの、前年を下回って推移している。

生産用機械では、低調な動きが続いている半導体製造装置が昨年の春頃から持ち直しに転じ、秋口以降は前年を上回って推移している。

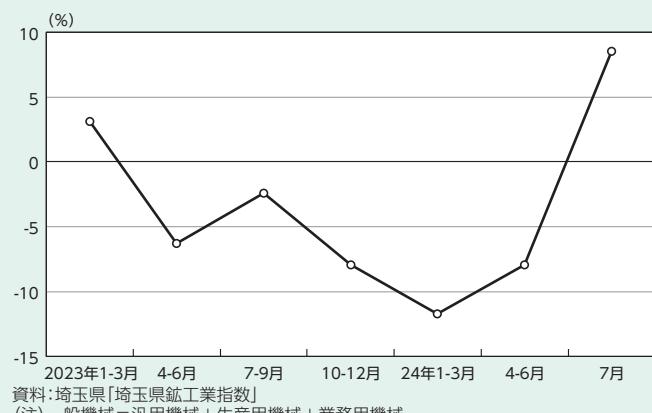
業務用機械では、医療用機械器具は横ばい水準で



推移する一方、パチンコ・スロットマシンは、緩やかながらも前年を上回って推移している。

今後も、生産用機械が底堅く推移する一方で、汎用機械は減少基調を続けると見込まれる。業務用機械は緩やかな増加を続けるとみられる。先行きの一般機械の生産は、前年並み程度の水準で推移すると見込まれる。

●一般機械の生産指数（前年比）の推移（埼玉県）



電気機械

大幅な減少が続いている



県内の電気機械(電子部品・デバイス+電気機械+情報通信機械)の生産指数は、本年1~3月期前年比▲18.9%、4~6月期同▲16.8%と大幅なマイナスが続いている。7~9月期もマイナスで推移した模様。

電子部品・デバイスの生産は、本年1~3月期前年比▲16.1%、4~6月期同▲15.4%、7~9月期もマイナスで推移した模様。全国では好調な推移となっているが、県内で多く生産される、集積回路や電子回路基板などでは不振が目立っている。

電気機械の生産は、本年1~3月期前年比▲23.0%、4~6月期同▲21.5%、7~9月期もマイナスで推移した模様。県内で生産される電気機械の多くは、産業用機械などに関連する装置類が多い。産業用機械の需要がやや低調となっていることなどから減少が続いている。

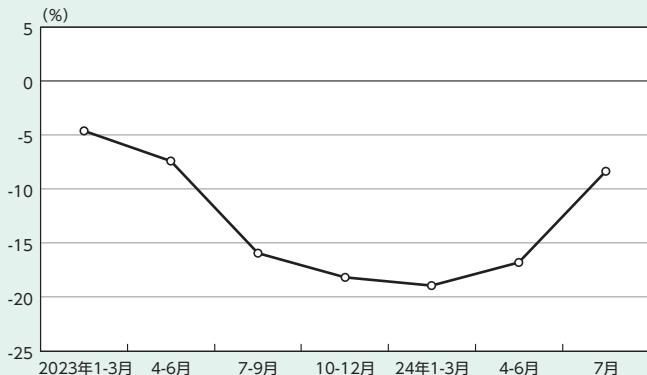
情報通信機器は、1~3月期前年比▲12.7%、4~6月期同▲8.8%、7~9月期もマイナスで推移した模様。情報通信関連についても、全体に弱い状況が続いて

いる。

県内での電気機械の生産は、県内での生産縮小や他県への生産移転の影響から長期的に減少が続いている。今後もこうした傾向が続くとみられる。

先行き10~12月期については、国内の設備投資が比較的堅調なことや、自動車生産の回復などを受け、持ち直していくことが期待される。

●電気機械全体の生産指数(前年比)の推移(埼玉県)



鉄 鋼

前年を下回る



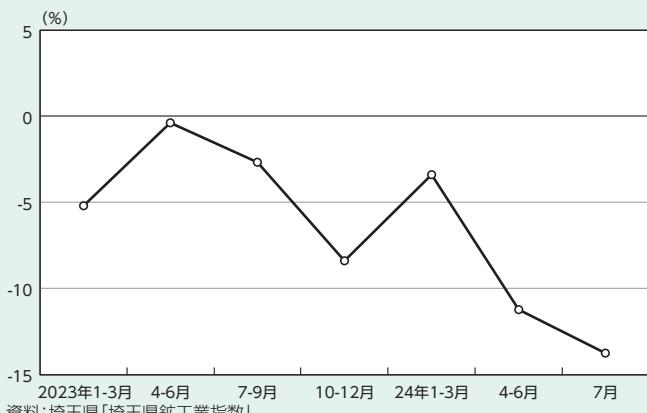
県内の鉄鋼の生産指数は、本年4~6月期の前年比▲11.2%まで、6四半期連続して前年の水準を下回った。7月についても、同▲13.7%と前年割れになっており、7~9月期を通して、鉄鋼の生産は前年を下回ったとみられる。

首都圏では、公共工事を中心に土木工事は比較的堅調だが、建築工事は低調で、鋼材需要の弱い状況が続いている。人手不足に伴う建築工事の進捗の遅れが、鋼材の生産に影響している面があるようだ。鋳物の生産についても前年の水準を下回っている。鋳鉄管は比較的底堅く推移しているものの、建設機械向けや工作機械向けが減少している。

鋼材の主原料であるスクラップの価格は、このところ下落している。製品価格とのスプレッドが広がり、鋼材メーカーの収益は堅調に推移している。一方、鋳物メーカーでは、原材料の銑鉄の価格が引き上げられるなかで、製品価格引き上げの動きが遅れており、収益状況は厳しい。

本年4月から建設業従事者に関する時間外規制が強化されたこともあって、建築の工事量は当面前年割れの状況が続くとみられる。このため、鋼材の生産も前年を下回って推移しよう。鋳物の生産についても、機械受注が減少基調にあることから、工作機械向けなどを中心に前年割れが続こう。鉄鋼の生産は先行きも前年を下回るとみられる。

●鉄鋼の生産指数(前年比)の推移(埼玉県)



建設

堅調な動きが続く

公共工事：県内の公共工事請負金額は本年1～3月期前年比▲3.6%、4～6月同期+31.8%、7～9月同期+11.7%と好調に推移している。

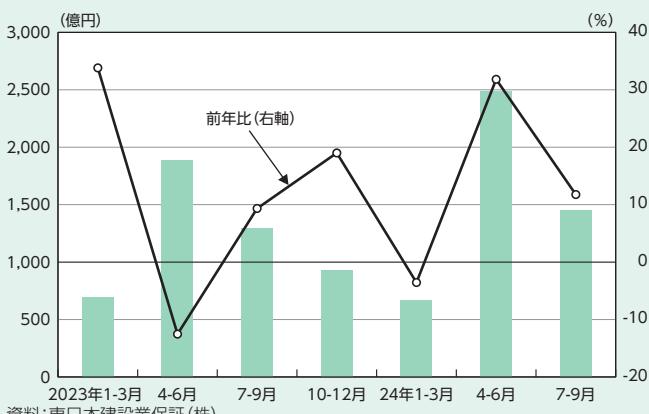
公共工事は受注残が多く、足元の工事量も高水準で安定している。工賃が上昇しているが、価格の上乗せを行っており、収益面も好調。公共工事の内容は、建物をはじめ、河川、橋梁、道路などの老朽化に対応するため改修・補修工事が多い。

先行きは、老朽化対策に加え、災害対策のための工事も増加すると期待されており、繁忙な状況が続くとみられる。ただ、従業員の高齢化、週休2日制の導入、残業規制など人手不足への対応が懸念材料となっている。

民間工事：県内の非居住用の建築着工床面積は、本年1～3月期前年比▲25.1%、4～6月同期▲32.0%となり、7～9月期はプラスで推移した模様。月毎の振れはあるものの、民間工事は着工ベースでマイナスが続いている。民間工事は人手不足の問題から、工事が遅れる傾向にあり、着工も全体に手控えられている。こうしたことから、受注残は相応にあり、工事量は大きな落ち込みとはなっていない。

用途別ではウェイトの高い運輸業用は一時の勢いが鈍化し、前年比マイナスで推移している。製造業用も、建築価格の上昇などから、一部先送りや見合せの動きから、大きな減少となっているが、このところ動きが出始めている。商業用や宿泊・飲食サービス用、サービス業用は持ち直しの動きがみられる。医療、福祉用は引き続き堅調な動き。

●公共工事請負金額の推移(埼玉県)



資料:東日本建設業保証(株)

現状
(7～9月)



今後
(10～12月)



先行きは、都内での受注競争が激しくなると、県内の受注に影響する懸念もあるが、都内では再開発など大型の工事が続き、県内では当面、工事量、価格面とも現状程度で推移する見込み。

住宅：本年1～3月期の新設住宅着工戸数は前年比+4.2%、4～6月期は同▲7.1%、7～9月期はマイナスとなった模様。住宅の着工戸数はやや弱い動きとなっている。

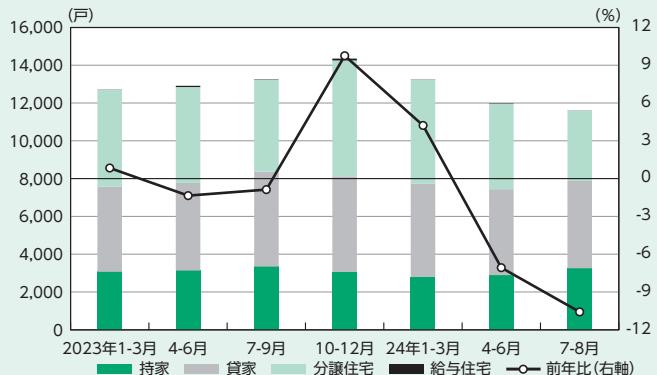
マンションは、供給戸数の減少、販売面での低調な動きがみられ、販売価格についても落ち着いている。これは、現在、利便性にやや劣る物件の販売が多くなったためとみられる。ただ、県南部など利便性が高く、人気の高い場所で大型物件の工事が始まっていることなどから、今後、供給戸数の増加や価格の持ち直しが予想されている。

戸建の分譲住宅は、物件価格の上昇や物価の上昇に加え、金利の動向を見極めようとする動きもあり、購入に慎重な動きがみられ、やや低調な動きとなっている。

貸家は、好調な動きが続いている。持家については、低調な動きが続いている。

先行きは住宅全般について、物件価格の上昇や金利動向、人手不足による供給制約など懸念される面があるものの、所得面での改善が期待され、相応に需要があることもあり、現状程度で推移するとみられる。

●新設住宅着工戸数の推移(埼玉県)



資料:国土交通省「建築着工統計調査」

(注)直近の2024年7-8月の利用関係別着工戸数は、7-8月の値を四半期化

小売

猛暑の影響で売上は総じて増加



百貨店：7~9月期の売上は前年を下回ったようだ。台風などの影響で来店客数が減少した。コロナ前の2019年の売上にも届いておらず、県内百貨店の売上はコロナ前には戻っていない。

品目別では、主力の衣料品は低調な動きとなったが、猛暑の影響でUV関連の化粧品や日傘、帽子、サンダラスなどの盛夏アイテムの売上が伸びた。食料品の売上は、値上げによる節約志向の影響で前年割れとなることが多い。一方、食品関連の物産展などの催事は堅調だったほか、飲食や手土産の売上も伸長した。

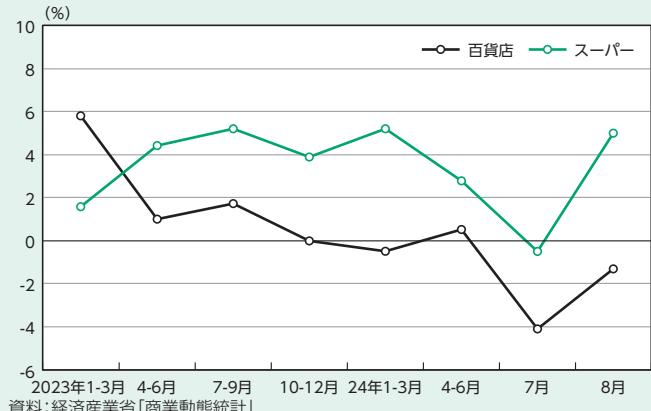
高額品は、伸びは鈍っているものの堅調に推移している。宝飾、貴金属、時計、バッグ、財布などの高級ブランド品の増勢が続き、富裕層を中心の外商の売上も増加している。中間層の消費は、値上げの影響で節約志向が強くなっている。インバウンドは増えているが、県内では全体に占める割合が僅かで売上への影響は小さい。

先行きは、高額品の売上増は続くとみられる。物価上昇は続いているが、賃金上昇やボーナスの増加などは追い風となるだろう。

スーパー：7~9月期の売上は前年を上回ったとみられる。コロナ前の2019年比でも増加している。ただし、物価高による消費者の節約志向で、1人当たりの買い上げ点数は減少が続いている。

品目別では、主力の食料品は、値上げによる単価上昇もあり前年を上回っている。猛暑で飲料やアイス、冷やし麺などが好調だったほか、調理控えで揚げ物などの惣菜の販売も伸びた。地震や台風による水や缶詰な

●百貨店・スーパー販売額(前年比)の推移(埼玉県、既存店)



資料：経済産業省「商業動態統計」

どの備蓄需要もあった。衣料品は、昨年に新型コロナが5類に移行し売上が伸びた反動もあり、季節商品の動きが鈍く減少した。日用雑貨などの住関連品は、化粧品、制汗剤、行楽用品などの販売が好調だった。

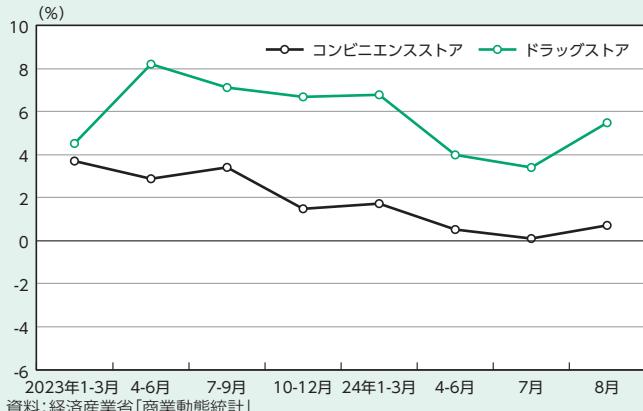
物価上昇で消費者の節約志向が強まり、メーカー製品よりも割安なプライベートブランド(PB)の販売が伸びている。PB商品は、製品種類の拡充や低価格帯の製品を増やしていることもあり人気が高まっている。また、まとめ買いが多くなっているほか、割安な大容量の商品がよく売れている。

先行きについては、商品単価の上昇が続くためスーパーの売上増は今後も続くとみられる。物価上昇は続いているが、賃金上昇率も高まっており消費マインドの改善が期待される。

コンビニエンスストア：7~9月期のコンビニの売上は、前年をやや上回ったとみられる。猛暑の影響で、ソフトドリンクやアイスクリーム、冷やし中華などの販売が伸びた。コンビニは売上は増加しているが、県内の店舗数は減少が続いている。消費者の生活防衛意識の高まりに対応した、商品の値下げや低価格帯の商品の拡充、実質値下げとなる増量の動きもみられた。先行きについても緩やかな増加が続くと予想される。

ドラッグストア：7~9月期の売上は前年を上回ったようだ。商品単価の上昇や店舗数の増加が売上増につながっている。猛暑の影響で、スキンケア商品や首元に冷却効果のあるネックリングなどのほか、化粧品や食品の売上も好調だった。先行きも増加傾向が続くとみられる。

●コンビニエンスストア・ドラッグストア販売額(前年比)の推移(埼玉県、全店)



資料：経済産業省「商業動態統計」